

震災避難者・移住者 視察交流会 報告書 2016年7月

期 間：2016年4月27日～5月10日

視察先：大阪・岡山・広島・福岡・熊本・宮崎・愛媛

報告者：山藤真吾/木村薫（コラースユニット mogura）

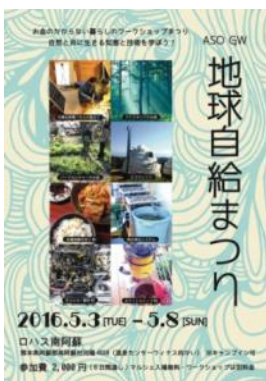


311の震災によりやむを得ず各地に避難・移住した方々も長い方で5年が経ちました。その方々の中には震災によって奪われた「日常」を見つめ直し、次の世代へと紡ぐ生き方や繋がりを学び、新しいステージで様々な試みを始めていらっしゃる方も沢山おられます。その方々を訪ね、音楽によってその繋がりを広げ、点在しているそれらのコミュニティ同志のネットワーク作りの役に立ちたい。そこで入手した情報を元に、引いては福島や周辺地域の被曝した子供達の保養や療養、留学などの橋渡しをしたい。そう言う思いで今回の交流企画を提出いたしました。

移住者の方々の実態調査として、移住後の生活、悩み、楽しみ、畑、田んぼ、家、等々のお話を聞きながら、地元の皆さんも交えて音楽で楽しく交流する目的の旅でしたが、丁度時を同じくして起きた熊本大地震。

私達の今回のツアーの目的の中心であった熊本・南阿蘇『地球自給祭り』（※参照）に私達は演奏と植木のワークショップの講師（植木山藤）として参加予定でしたが、4月14日の熊本地震で地球自給祭りの会場近辺の南阿蘇も未曾有の被害に遭いました。熊本には移住した友人が沢山いました。

そこで急遽、今回の目的にカンパと支援物資集めを追加し、軽トラックも物資を運ぶため、そして現地の不明な状況にも安全に対応する為に荷台をキャンピングカー風に改造して春のツアーはまた一つ違った緊張感と共にスタートを切りました。



※地球自給祭り（ソーラーパネル、ロケットストーブやオンドル、発酵食品、等々の地球にやさしい生活の勉強出来るワークショップ満載のお祭り）

4月27日（水）大阪・新世界 イマジネーション ピカスペース



大阪の繁華街として有名な新世界。通天閣を見上げる表通りは賑わいを見せるも1本通りを入れてアーケード街に歩み込むとそこはシャッター通り。そんな中にピカスペースはありました。かつては通りの出口が見えない位に人で溢れていましたが、中心街が開発を中心とした側に移り、客足も激減したそうです。しかしながらさすが関西。「今では通りでボーリングができる。」などとひねりの効いたギャグのようなポスターが通り沿いの店ごとに、その商売に応じた内容ごとに各種貼られており、不景気も逆手に取る関西の方の商いへの想いには「参った。」と言う感じでした。このピカスペースのオーナーを中心とした若い人たちが、このシャッター通りにまた人がまた戻ってくるようにと、通りを開放して「セルフ祭り」と言う名の自己表

現の場を提供しています。

アーケード街は店舗の上階が住居となっており、そこにまだお住まいの昔からの住人の方たちとも連携を取り合い、やってくる若い人たちとの交流も盛んに行なわれているようでした。大型店舗などの進出により、地方の商店街はどこに行ってもシャッター通りになっているのをよく目にします。こういう試みが各地に広がっているようです。地元の方との交流によって地元を見直す事は大切だと思いました。関西のノリが気に入ったので東京から移住してきたと言う方にもお会いしました。とても大阪を気に入られたご様子でした。

4月28日(木) 岡山・建部 ののカフェ

岡山県は移住者支援に力を入れている市町村が多いためか 2015 年の調査では移住先としての人気が一番に高いようです。この「ののカフェ」はアーティスト(小倉瑞恵さん/アーチさん)のお二人が古民家を9年かけて改装し開いたお店です。すでに地元の方や移住して来られた方々の交流の場となっていました。近隣在住のアメリカ人のミュージシャンとも一緒に演奏を楽しみました。



翌日はこのカフェがある吉田地区のお祭り「れんげ祭り」を覗いてきました。この地区の方々の小さなお祭りでしたが、こういうお祭りがあると地元との繋がりがすぐにできそうに感じました。キーワードは「地元と繋がる」でしょうか。

幸いな事にこのお祭りに出店されていた服部いくよさんに運良く遭遇。小倉さんに紹介していただきました。服部さんは東京・国分寺市からこの地区に移住し、のち、福島の子供たちの保養や被災者の移住支援を全国展開しておられるそうです。驚いた事にいくよさんは、私達 mogura が結成前から在籍しているバンド「つつくれ」のボーカル、花田さんの古い友人でした。私達、かけこみキャラバンも保養や移住に関する活動を始めようとしている事をお伝えして今後はお力を貸していただける旨を確認しました。服部いくよさんの団体につきましては

→311 受入全国協議会 URL <http://www.311ukeire.net/>



4月29日(金) 岡山・仁科邸



仁科さんご夫婦は私達の古い友人です。奥さんは以前、かけこみ亭でお手伝いをしていた事があります。吉備中央町のお宅は7LDK。この家は福島の被災者の方々の移住支援をしている団体「転入定住支援センターいまここ」に登録しています。希望があればこのお家を移住者の方に貸したいそうです。仁科さんは大きな家なので、できれば2世帯で住んでいただきたいそうです。一般道に面した家ですが、買い物などは車を使っています。ちょっとしたカフェでもできそうな緑に囲まれた素敵なおうちです。



→ 転入定住支援センターいまここ



→ 転入定住支援センターいまここ

URL <http://kibi-imacoco.org/wp>

4月30日(土) 広島・中区 HASU CAFE

広島市に入りました。初めて訪れた場所です。歴史を想うと背筋がピンと伸びる感じがしました。しかし、ライブ会場では朝まで楽しく延々続く打ち上げに、その気持ちも消えていました。色々な方とお話ししましたが、感心したのは集まった若い方々の社会意識の高さでした。やはり広島で起こった出来事は当事者として忘れない。広島や戦争について沢山勉強しているのだろうなと思いました。でもそう言う話ができるからこそ、すぐに



友達になれる。広島はツアー先の中でも住んでみたい街の一つになりました。moguraはこの夏、8月6日の原爆祈念日にこの平和公園の中で演奏することになりました。これも「広島」をキーワードに繋がった友人たちの力によるものです。

5月1日(日) 福岡・高砂 遊来友楽(ゆらゆら)

ようやく九州入り。地震のあった熊本ではまだ余震が続いていました。福岡でのブッキングをお願いしていたミュージシャンの柿木さん(通称:KAKKIN)が、福岡の友人たちに呼びかけて沢山の支援物資を集めてくださっていました。今まで訪れた会場でいただいた沢山の物資やカンパとも合わせて熊本への支援準備は整いました。



柿木さんご一家も震災後、東京から福岡へ。元々福岡の方ですが、生活の基盤を移す事に随分悩まれたそうです。福岡に戻って3年。やっと音楽活動ができるようになってきたとおっしゃっていました。



写真は柿木さんがご自分のバンドTシャツを販売し、その売り上げを全額カンパしていただいているところです。

5月2日(月) 熊本・ロハス南阿蘇



いよいよ震災被害にあった南阿蘇に入ります。柿木さんが通行マップを用意してくれ、通行止めになっている箇所を確認して福岡を経ちました。阿蘇に近づくに連れブルーシートで屋根を覆った家並みが増えていきました。ブルーシートは飛び石のような状態で阿蘇の全土に広がっているようでした。断層に従って被害の大きく出た箇所とそうでない箇所に分かれたと現地の方がおっしゃっていました。



道をやはり間違えて崩落した阿蘇大橋付近まで行ってしまいましたが、無事に到着。集まった支援物資とカンパ合計79,039円を「南阿蘇ボランティアよみがえり」様にお届けいたしました。

このボランティア団体は先に紹介しました、「自然と共に生きる知恵と技術を学ぶ」をテーマとした『地球自給祭り』を開催しようとしていたPIKALE☆通称ピカレ君と、阿蘇で「地球が愛であふれる暮らし・アート・

カルチャーを発信している冊子』『ローカルメディア3』編集長のさわだけいこさんが共同で震災直後に立ち上げた復興ボランティア団体です。(以下 よみがえり)

このよみがえりの拠点となった『ロハス南阿蘇』は、従来は道路向かいの温泉センターに集まる方々の食事や会合の場となっているレストランです。震災の被害を一切受けず、震災直後にこの建物をボランティアセンターとしてオーナー（松尾光義さん）が解放し、松尾さんも含めた方々で活動していましたが、現在は被災地区ごとに、ロハス南阿蘇よみがえり（ピカレ）・南阿蘇村たすけあい（松尾さん）・ローカルメディア3（さわだけいこさん）の3団体に分かれまして。さらに互いに連携を取り合っており現在も活動を続けています。



順に
さわだけいこさん
PIKALE☆（ピカレ）
スタッフミーティング
ボランティアノート

南阿蘇には移住した方が大勢いらっしゃいます。近くの別荘に住む方もスタッフとして素晴らしい仕事をなさっていました。「復興」と言う言葉で移住した方々、ボランティアに訪れた方々、そして被災された方々が一つになって、より信頼を深めたと言えると思います。来年、もしまたこの『地球自給まつり』がここ南阿蘇で開催されるとすれば地元の皆さんに歓迎され注目されるお祭りになるだろうと思います。私達が滞在した間も作業を終えて帰ってくるスタッフたちはいつも和やかで笑いが絶えませんでした。

しかしながら未だ復興は進んでいません。この梅雨の大雨で被害は更に深刻になっています。



5月3日（火）熊本・ロハス南阿蘇



翌日、夕方までロハス南阿蘇のボランティア事務局としての体制作り。あちこちに散らばった資材や支援物資の整理をしました。山藤は棚づくり。木村はレストランの広い台所を他のスタッフと一緒に掃除をしました。電気は来ていましたが、水道は出ませんでした。節水と工夫で問題を解決していました。



夕方になり、終了。全員で食事の後、私達 mogura の演奏を楽しんでいただきました。たまたま来られていた被災されたご夫婦にも喜んでいただけたようでした。

ここロハス南阿蘇では色々な出会いと再会がありました。自分の生活をとりあえず置いてやってくるボランティアの方々は、「力になりたい」その一つの気持ちでやってくるので初対面でも心が通じるような気がしました。すぐに仲良くなりました。

ロハス南阿蘇に行って貴重な体験ができて本当に良かったと思います。

5月4日(水) 熊本・ロハス南阿蘇より宮崎へ

この3日間でしっかりと繋がった新しい友人達とハグをし、後ろ髪を引かれる思いで南阿蘇を経ちました。奇跡的な出会いと再会がありました。私たちが到着した日、先入りして出迎えてくれたスタッフの中に、次の目的地、宮崎・都城「Bistro Orenchi」のオーナー（通称ヒロ兄）が居たのです。初対面でした。そして一緒に宮崎から来た友人、井藤友昭さんを紹介してくれました。三重県出身の井藤さんは現在宮崎にその住まいを持ち、オーガニックフェスやオーガニックレストランなどの普及にあたる活動を行っています。積極的に宮崎と関わり市議選に出馬の経験もあります。彼は翌日、先に帰ってしまいましたが、私たちも予定を変更して彼が現在勤めている宮崎・加江田「天空カフェ・ジール」を訪ねてみる事にしました。

5月4日(木) 宮崎・加江田 天空カフェ・ジール



宮崎を訪れるのはmoguraとしては二度目。今回は1日オフを取って井藤さんの勤める「天空カフェ・ジール」へ。早速、お会いできて再会を喜びました。

この建物はバブル期に「ハーブ園」としてオープンしたそうですが倒産。放置され荒れていたところを宮崎・都城出身の福田さんと言う女性が買い取って改造、オープンしたオーガニックレストランです。井藤さんはそこのシェフをしてもらいました。



宮崎にも移住した方が沢山おられます。このジールの周辺にはそういった方が沢山住まわれているそうです。このお店も環境や放射能に関する情報発信地となっていました。福田さんにもお会いできました。宮崎がこんなにお洒落になって

いた事に感動しました。以下、お店を紹介します。小高い山の中腹、遠く海が見渡せる絶景ポイントにありました。



井藤さんから「今夜、宮崎シーガイア（九州一の高さ154mの43階建て高層ホテル）内で『ナイトマーケット』をやってるから来てみたら？」とお誘いを受けました。「ホテルの中でナイトマーケット？」どんな事になっているのか興味が沸きました。

5月4日(木・夜) 宮崎フェニックス・シーガイア・リゾート 『オーガニックナイトマーケット』

フェニックス・シーガイア・リゾートは1993年頃にまず大型室内プールやゴルフ場建設を着工し、その後ホテルや国際コンベンションセンターなどを増設して翌年に全面開業しました。宮崎県や宮崎市が出資する第3セクターとして設立されましたが経営不振の為、第3セクターとしては過去最大の負債3,261億円を出し、



あおりを喰らった県内の業者が次々と倒産しました。一ツ葉海岸の広大な松林を伐採して建設した為、当時、アマゾンの森林伐採反対運動を世界展開していたイギリスの有名ミュージシャン“STING”が、シーガイアのコ



ンベンションセンターホールのこけら落としのコンサートの為に来日した際にとっても怒ったそうで、このお話しは宮崎でも有名です。

そう言った曰く付きのホテルですが、現在はセガ・サミー・ホールディングスの経営です。オープン当時から富裕者層をターゲットにしたホテルでしたので、市内や県内の人たちには縁遠い所でした。



ホテルの中を通り歩いて行くとホテルとコンベンションセンターを繋ぐエントランスに出ました。そこが『オーガニックナイトマーケット』の会場でした。実はこのナイトマーケットの発案者がジールのシェフ、井藤さんでした。井藤さんがシ



ーガイヤに持ち込んだこの企画は、以前は井藤さんの仲間と出店者を集めて『宮崎オーガニックフェスティバル』として開催していたのですが、集客があると知ったホテル側が主導権を握ってしまい、井藤さんは今年企画を外され、出店者の仲間たちは残る形となりました。井藤さんは会場の皆さんに挨拶されていました。「ここ



で僕が現れなかったら多分、皆が気持ち良く続けていけないからね。」そうおっしゃっていました。ホテルの中庭ではコンサートが開かれていました。お客さん達はバザーで買った食べ物をシートに広げ、ゆっくりと音楽を楽しんでいました。実は、井藤さんと知り合う以前、このナイトマーケットに出店している友人に今回の私達

の宮崎でのブッキングを依頼した際、このシーガイヤの名前も挙がっていましたが、結局、無しになってしまいました。どなたかが外されたと聞いていましたが、井藤さんの事でした。

しかし、どう言った形にせよこのバザーが宮崎の方々の新しい交流と情報発信の場になった事に間違いありません。しかも抜群のセンスで。

県外からやって来て、こうした地元のテコ入れのアイデアを出し、地元企業と協力してそれを実現している方をあちこちで見かけました。九州全体が生き生きしているように感じました。何よりも、このバザーの発案者が井藤さんと知らずに南阿蘇で彼に出会った事は、奇跡と言うか必然だったと言うか。ドストライクな出会いでした。

5月6日(金) 宮崎・都城 Bistro Orench



その奇跡的な出会いのもうひとつ、ヒロ兄のお店、Bistro Orench (ビストロ俺んち) もまた古民家を2年かけて改造して作ったお店です。ライブやイベントの告知をすれば市内市外から沢山のお客さんがやって来るそうです。宮崎市内で養蜂をやっている方が採れたばかりの蜂蜜を持って来ました。蜂の巣ごと入っていました。彼はあのナイトバザーに「蜂蜜次郎」と言う名前で毎回出店しているそうです。「安全で美味しい食べ物」と「本物」について次郎さんも交え、お店のシェフや奥さんと情報交換しました。奥さんは東京の方ですが、やはり震災後すぐに移住を考え始め、その移住先に宮崎を選ばれたそうで、その理由が「行った事のない所で暮らしてみたかった。」だそうです。縁あって、同じシングルマザーであるお母さんと最



初は共同生活をしていましたが、あまりの刺激のなさに「何で宮崎を選んだんだろう。」と悩んだそうです。しかし、3年経って友達が増え、繋がりが増えるうちに今のご主人と巡り合ったそうで「もう東京には帰りたくありません。」とおっしゃっていました。お子さんの食べ物について、「東京での買い物には気を遣うばかりで、宮崎に来てそのストレスからは完全に開放された。」との事です。色々なツアー先で「安全な食」と言う言葉は沢山耳にしました。これもまた一つのキーワードだと思いました。奥さんは自らの企画で昨年2015年より宮崎県内で宮崎初となる『アースディ』を開催し、県外県内から沢山の人が集めました。東京で培った「企画」のノウハウを宮崎で展開実践している方でした。

ジールの福田さん、オーガニックフェスの井藤さん、俺んちのヒロ兄、シェフご夫妻、そしてやって来る若い方々で宮崎では新しい試みがすでに始まっていました。

5月7日(土) 愛媛・道後温泉 サークスパー・ワニとサイ

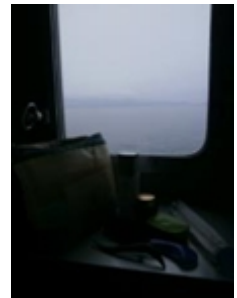
宮崎を出発し、大分県臼杵港より九四フェリーで四国へ渡ります。いよいよツアーのラスト愛媛の道後温泉に到着しました。道後温泉の中でひときわ風格のある「いさには神社」の目の前にある『サークスパー・ワニとサイ』です。

昨年のツアーでお世話になった、現在は愛媛在住のミュージシャン、中ムラサト子さんの紹介でお友達になったタカ君のお店です。サークスパーとなっているのは、店主タカ君が操り人形や影絵などでお客さんを楽しませているからです。

中ムラさんもまた移住者。今回は都合で一緒できませんでしたが、中ムラさんは飛騨高山生まれ。震災以前は横浜にお住まいでした。愛媛を移住先に決めたのはまず、知り合いの方がすでに住まわれており、借家を探してくださった事、その街を先に訪ね、ゆっくり歩いて回るととても気に入った事がポイントだったそうです。昨年のツアーの際に街の中を案内して頂きました。小さな港町で、漁港に行くと小さなお店がありました。ここで獲れたばかりの魚をおばちゃん達が売っています。中ムラさんは借家を探してくださった方から「今度、こちらに引っ越して来られるミュージシャンの中ムラサト子さんご一家です。」と町内の方たちに紹介され、その場でコンサートも開かれたそうで、彼女はこうして「ミュージシャンの中ムラさん」として地域の方々に覚えて頂けたのを「説明しなくて良くなったの。」とおっしゃっていました。これはとてもいい関わり方の入り口だと思いました。おばちゃん達が「この人はねえ、歌がとっても上手なのよ。」と居合わせたお客さんにも紹介していました。なるほど、説明する必要はありませんでした。

今回は高知県の川治いの田舎で暮らす、ミュージシャンであり家具作成や絵画など多彩な活動をなさっている芸術家の村井夫妻も演奏してくれ、とても楽しい夜となりました。ご夫婦は高知・四万十川で毎年開かれる

『ディープ・ブルース・フェスティバル』の中心人物です。このフェスには昨年もかけこみキャラバンで訪れ、東京からも3バンドが出演し、高知の方々とも繋がりをもちました。村井夫妻はこのフェスのテーマ「ブルース」の本物を勉強したいと突然、アメリカ横断ツアーを打ち立て、アメリカ西海岸からブルースの聖地ニュー



オリンズまで路上演奏しながら旅をしました。その様子はYoutubeにもなっています。好奇心に満ちた若いお二人のお話しは、アメリカツアーの事、自由にそして優しい素敵な暮らしについてなど尽きず、沢山のインスピレーションを頂きました。

5月8日(日) 広島・尾道 パサール・レモン



私達が在籍し、復興応援秋祭りにも出演したバンド「つちっくれ」のボーカル花ちゃん(花田直季さん)が同じ尾道にある島、百島に移住した件は前回の四国視察で報告いたしましたが、その花ちゃんの住む百島の向かいに見える海岸線にそのパサールレモンはあります。島根県に Pasar Moon (パサール満月海岸) という『お金に頼らない豊かな暮らし』を実験・実践しているグループがあり、パサールレモンはその分家のような存在です。このパサールレモンに暮らす三科さん家族は、「実際にやってみないと分からないから。」と海岸線に建つ家を借りて電気・水道・ガスなどの公共機関に頼らない暮らし「オフグリッド」生活を送っています。手作りのカマド、落差を利用して裏山から引いて作った水道、ソーラーパネル2枚分の電気だけで暮らしは成り立っています。裏山の雑木林が大事な燃料源の薪になります。最近、ようやくお風呂ができたと言う事で早速入ってみました。まだまだ挑戦は続いていて、最近トイレを改造中で使えなく、海岸や裏山で用を足しているそうで、なかなかサバイバルな一面もまだあるにしろ、ご家族は楽しく暮らしておられました。

最近、ようやくお風呂ができたと言う事で早速入ってみました。まだまだ挑戦は続いていて、最近トイレを改造中で使えなく、海岸や裏山で用を足しているそうで、なかなかサバイバルな一面もまだあるにしろ、ご家族は楽しく暮らしておられました。

5月9日(月) 広島・百島 花田家

翌日はせっかくですので、パサールの三科さんと一緒にフェリーで花田さんの住む百島へ渡る事にしました。フェリー乗り場は三科さんのお家の近くでしたので車は置いて船に乗り込みました。

東京に暮らしていた花田さんは、お子さんが就学するタイミングで百島へ移住を決めました。農業をやりたいかった花田さんと、「いちご農家」の担い手を探していた百島のイチゴ栽培農家の藤田さんが知り合い、若い家族の移住者を援助する形で藤田さんが受入れ準備を整えてくださったそうです。奥様は東京生まれの方で移住については住み慣れた街や友人たち、そして親と離れて行く事に悩まれたようですが、岡山生まれのご主人の実家は逆に近くなる事も考慮され、条件を付けて移住を決意しました。それは『病院』でした。幸い、百島には診療所、小中学校があります。2年経ち、花田さんの奥さんもお子さんもこの小さな島のアイドルになっていました。最近、また新しい若いカップルが移住して来られ、島の方たちも集まったその結婚式で花田さんとお子さんが歌を披露したそうです。「イチゴが生ってくれる限りは出荷しなきゃならないし、その間にまた次の苗を育て始めなきゃならないし、とにかく後4~5年は様子を見ないとなあ。」とおっしゃっていました。苺の他に野菜を作って、道の駅などで販売してもらっているそうです。伺った日は、ご家族と島の方々と浜辺でバーベキューをなさっていて、私たちも一緒に楽しみました。



診療所の船



長い報告になってしまいました。が、それほど思いがけない事が次々に起こり展開していきました。南阿蘇に届ける支援物資やカンパを沢山の方が私達に託してくださいました。行った先々のあちらこちらで新しい試みが始まっていました。そこには、新しい生活に不安を感じながらも、新しい土地で自分のスキルを活かして地元の方たちと積極的に関わって行こうとする移住した方々を沢山見ました。

都市部に暮らすと希薄になってしまいがちな人間関係です。日ごろからの近隣の方との挨拶や関わり合いは大切なものです。そこからコミュニティは始まります。誰かの役に立てた時、人は喜びを感じます。昔々、お味噌やお醤油をご近所で貸し借りしていたような、そんな和やかなコミュニティの復活が今、一番大切なものだと思えました。

私達が巡り合った方々は移住された方の成功例の一部かもしれません。東京から宮崎に避難移住されて来たという高齢の女性の方とお話ししました。「私は車の運転もできないし、こんな田舎に来てもうここから出られないのよ。」そう寂しそうにおっしゃっていました。福島からの避難移住者がバッシングされているような記事も目にします。

地震大国、日本に於いて、今はどこに住んでいても原発が無くならない限りはこれからも安全に暮らしていける保証はどこにもありません。地震が、原発事故が無ければ「避難」「移住」と言う現象は起きなかったかも知れません。しかし、5年経った今「地方再生」と言う言葉と共に、その実態を見れば多くの移住者の方々が積極的に参加し活躍する姿を見ました。私達が毎年復興支援のイベントを開催している岩手県釜石市の皆さん方にも私どもかけこみキャラバンが「勝手に応援しに来ている祭り」ながら、ご理解いただき積極的に参加交流していただいています。

それぞれの方々に沢山のご苦労があったと思います。苦難を乗り越し、または乗り越そうとしている皆さんの笑顔には私達が励まされました。新緑の中を敢行した今回の避難移住者支援交流、南阿蘇ボランティアのツアーの先々は明るく輝き、私達は「日本は大丈夫。」と感じた次第です。

追記ながら今回の復興支援秋祭りには保養の為に福島から子供たちと親御さんを招待する予定です。これはかけこみキャラバンスタッフの平岡義子さん、舟木瞳さんお二人が現在、話しを進めております。他にも撮影スタッフの塩原さんは山梨の団体で、また岡山の服部いくよさんを始め、宮崎・天空カフェジールでもその活動に取り組んでおり、今回の移住者支援交流の一つの目的であった「福島や周辺地域の被曝した子供達の保養や療養、留学などの橋渡し」となる事へ一歩近づいたと言え、これからの展開に対応できるようにかけこみキャラバンの体制を整えていきたいと考えております。



なお、今回の計画を提出した際に挙げた目的地、岡山・ハレマニアースビレッジ（家づくりやオーガニックファームの指導育成）は「れんげ祭り」に変更、熊本・ふくしま文庫（福島の子供たちの保養施設、及びアンナプルナ農園を運営）は地震の為、静岡・パラディソは日程の調整不足で訪問できなかった事を報告いたします。